

過日結婚式に出席した。医師と看護師の若い二人は、沖縄県の離島で知り合い約2年の交際を経て結婚した。男は9月から、出身地である岩手の県立病院に勤務する。震災から一年半が過ぎたが東北の復興は途上だ。震災時、地元になかったという負債を男はこれから少しずつ返していく。高校時代野球部で甲子園を目指していたという男の結婚式は、多くの同僚に祝福された楽しいものであった。その余韻に浸っていたとき、一本の訃報が入った。京都からだった。結婚式の会場から直線距離にして1キロもない、御所を挟んだ場所が一人の男の最後の場所だった。享年59歳。酒をこよなく愛した男のあまりに早い一生だった。



やまもと たろう
山本 太郎



酒を愛した男の死

告別式では2人の男性が弔辞を読んだ。一人は男の退職した元同僚、10歳ほど年上だった。もう一人は小学校から高校まで同級生だったという。

同僚の男性は、これから忙しくなると弔辞を結んだ。これからの数カ月、あるいは1年間は、亡くなった男が愛した飲み屋を一軒一軒回り、店の主人と男の思い出話をする。男が愛した飲み屋が何軒あるか分からないが、その全てを回るといふ。

同級生だった男性が紹介したのは、亡くなった男が高校生のとき「幸せ教」をつくり、自ら教祖と

なったという逸話だった。どんな嫌なことをされても、どんな嫌なことを言われても「ありがとう」と言おうというのが教義だったそうだ。男は教祖であり、同時にた

だ一人の信者だった。あるとき、亡くなった男の頭を紙で作った筒で殴ってみると、聞こえてきた言葉は「ありがとう」だったという。

男とは、15年ほど前、東京大学大学院生だったころ文科人類学系研究会で知り合い、以降、親しくしてもらった。当時男は北海道大学にいたが、私が京都大学へ移ったとほぼ時を同じくして京都大学へ移ってきた。

最後に会ったのは、2年半ほど前だった。京都へ来ないかと私を誘うために男は長崎へやって来た。そのとき「うん」とは言えなかった。男は言った。「まあいいか。それも人生。今日は山本さんとのもう」
(長崎大学熱帯医学研究所教授)